

タイトル	自由と「権力の偏重」 - 福沢諭吉とJ.S.ミル
著者	中村, 敏子; NAKAMURA, Toshiko
引用	北海学園大学法学研究, 60(4): 49-71
発行日	2025-03-30

論 説

自由と「権力の偏重」 —— 福沢諭吉と J.S. ミル

中 村 敏 子

はじめに

福沢諭吉は生涯「一身の独立、一家の独立、一国の独立、天下の独立」を追及し、自由について考え続けたが、その基本的社会構想が儒学にもとづいていたことは、拙書『福沢諭吉』（集英社新書）において論じた。しかし彼は儒学にもとづく社会構想を持ちながらも、つねに西洋とそれを照らし合わせるという作業を行ない、自らの思想を鍛えていったのである。本稿は、福沢がそのような作業をする中でも多く学んだ J.S. ミルの『自由論』と『文明論之概略』における議論を比較し、その影響を考察する。

幕末から明治にかけて福沢諭吉は多くの西洋書を読んだが、そのなかでもとびぬけて多いのが J.S. ミルの著作である。松沢弘陽によれば、『文明論之概略』執筆前後の明治 7 年 2 月頃から明治 8 年 4 月頃の間、ミルの『自由論』『代議政治論』『経済学原理』『女性の隷従』という主要著作を読み、1 年後の明治 9 年 4 月に『功利主義』を読んだことがわかっている。それ以外に、明治 7 年から 10 年にかけて『自伝』および「文明論（Civilization）」を含むいくつかの論文を読んでいる。⁽¹⁾ 現代の研究者も顔負けの勉強量である。しかし、これらの著作から福沢がどのような影響を受けたのかに関しては、これまであまり検討が行なわれてこなかった。⁽²⁾

本稿では、福沢が人間と社会の進歩についての大枠を示した『文明論之概略』とミルの『自由論』を比較することで、福沢が、ミルによる西洋の「自由」についての見解をどのように受け止め、日本の状況についての分析を行なったのかについて検討する。そのうえで福沢が西洋から何を学び、日本をどのように導こうとしていたのか、その思想的特徴を明らかにしたい。

1. 『自由論』

『文明論之概略』と比較するために、まずミルの『自由論』で何が論じられているかを見ていこう。ミルが『自由論』で扱っているのは、「社会的自由 (Social Liberty)」と呼ばれるもの、すなわち社会がどこまで個人に対して自由を制限できるのかについてである。ミルがこの主題を扱ったのは、社会により個人の自由が抑圧される状況があったからである。ミルは、社会による抑圧を作り出す勢力として、世論とキリスト教をあげて批判した。日本の『自由論』研究においてはキリスト教に関してほとんど触れられることがない⁽³⁾が、アラン・ライアンによれば、ミルと同時代の多くの人は、『自由論』をキリスト教に対する攻撃だと受け取ったという。⁽⁴⁾ また『自由論』に関するステファン・コリーニの解説によれば、この本は、主としてヴィクトリア時代の社会における強圧的なモラリズムに対する抵抗を意図したものだだったという。特にイギリスプロテスタンティズムの下劣な精神的傾向によって、モラリズムに対する抑圧の態度が強められているようなさまざまな事項があったからである。⁽⁵⁾

ミルはまず第1章において、世論の圧力を問題にする。そこでは、歴史が進んで多数が政権を握るようになることで、「多数の専制 (the tyranny of the majority)」という事態が生じていると述べられる。「多数の専制」が行なわれると、そこから逃れる手段がないために人生の細部にまで圧力が浸透して、人々の魂にまで影響が及んでしまうのだとミルは論じる。つまり個人の独立と社会による統制との間に線を引こうとするとき、「多数の専制」のような状態があると、往々にして理由など考えずに、みんながやっているからという慣習によって物事が決められ、押し付けられることになるというのだ。それをミルは「慣習の魔法のような影響 (the magical influence of custom)」と呼んでいる。

それに対しミルは、文明化した社会において、ある人の意志に反して強制力が正当に行使されうるのは、その人による他者に対する侵害があり、それを阻止するという場合に限られるべきだと主張する。それは、「自分自身そして自分の身体と精神に対しては、当該個人こそが主権を持つ」⁽⁶⁾ からである。そして「自由」という名にふさわしい自由な状態とは、他者の邪魔をせずに、自分のやり方で、自分がよいと思うことを追求することなのだとして述べている。

続いて第2章では「思想と討論の自由」について論じられる。ミルは、

なぜ思想や討論の自由が必要かについて、以下のように論じる。つまり人類が、非常に遠くの未来にある知的に発展した段階に入るまでは、人間が多様な意見を持つとき、それらがすべて真実であることはあり得ない。それゆえある意見が真実であることを証明するためには、反論と突き合わせて吟味することが必要なのである。ミルは、ニュートンの理論でさえ、反論が許されていなければ正しいことが証明されないだろうと述べて、討論の自由の必要性を強調する。このように討論の自由が認められることは、真実を求めるという作業において重要なのであるが、それだけでなく、互いに完全ではない意見が主張されているときには、討論することで相互に意見を改善することもできるとミルは述べる。

もし異なる意見を排斥することが続くと、人々は委縮して異なる意見を述べるのをやめ、自己規制するようになる。そして議論の内容が次第に矮小化していく。ミルはこうした事態は、単に弾圧された人々に被害をもたらすだけでなく、社会全体にも損害が及ぶのだとする。すなわち人々が自分の意見を持つことをやめ、正統だといわれる意見に頼るようになることで、人々の間に知的停滞がもたらされるというのだ。このような社会全体の停滞した状況を、ミルは「精神の奴隷状態 (mental slavery)」⁽⁷⁾と呼んでいる。彼は、人類の幸福は、様々な意見を闘わせる思想の自由が保証された状態 (mental freedom) の存在によって、ゆるぎない真実が増加し、深化することによって達成されると主張するのだ。

ここから、人間を画一的な存在にしようとするキリスト教道徳に対する批判が加えられる。キリスト教の教義は、人間を悪とみなし人間性を否定的にとらえる。その教えは反動としての性格をすべて持っているミルは断言する。それは積極的であるよりも否定的であり、能動的であるよりも受動的であり、高貴さよりも無垢であることを好み、善を精力的に追及するよりも悪に対する禁欲を選択する。その教えの大半は、「汝はしてはならぬ (thou shalt not)」という形で教えられるのである。

このようなキリスト教道徳に従って人間が形成されるのであれば、その結果人間は、非常にみじめな従属的なタイプの性格になってしまうだろう。そして神の「最高意志 (the Supreme Will)」に従うことで、「最高善 (Supreme Goodness)」に至ることができなくなってしまうだろうとミルは述べる。ライアンは、ミルのこうした厳しいキリスト教道徳批判は生涯変わらないものであり、ミルが最も憤ったのは、神の意志を、行為の正しさ、そしてそれを遂行する動機の源泉とすることだったと説明

している。⁽⁸⁾

このような人間類型に対する反対として、第3章の「個性的な人格 (Individuality)」の議論が展開される。「幸福の一つの要素としての個性的な人格について」と題された第3章こそ、ミルの議論の中心をなすものであろう。Individuality という語は、通常「個性」と訳されるが、ミルがこの言葉で論じているのは、人間の全人格的なあり方だと思われるので、本稿では「個性的な人格」という訳語を使う。

ミルは、人類が現在より進歩して真実のすべての側面を認識できるようになり、一つの真実に到達するまでは、人間の間に多様性が存在するのは望ましいことだと論じる。様々な意見や生き方があることで、よりよい道が見つけられるのである。それゆえ他者に影響を及ぼさない限り、それぞれの人が自分の「個性的な人格 (Individuality)」を発達させることは認められるべきで、それは人間の幸福の主要な要素のひとつなのだと主張する。

これに対し、伝統や他者による慣習が行動規範である場合には、個人の自発性は、そのような行動規範に従った多数が支持する道徳に反するとして排斥され、人類の幸せの、そして個人や社会の進歩の重要な要素が欠けてしまうだろう。このように述べたうえでミルは、人間の認識や判断、道徳的な傾向などの能力は、自分で「選択する」という行為によってのみ行使できるのだと主張する。それゆえ他者に人生の選択を任す人は、人間としての能力ではなく、猿まねの能力以外必要ないことになるだろう。そして彼らの精神は、くびきにつながれてしまうのだと批判するのである。

ミルはここから、そのような状態を生み出すものとして、カルヴィニズムの理論を弾劾する。カルヴィニズムは、人間の非常に大きな罪のひとつは自分の意志を持つこと (self-will) であり、人間が行なうことのできる善のすべては従属の中に含まれていると説く。人間性は非常に腐敗しているので、人間性を抹殺するまで救いはないというのだ。人間は自身の能力を必要とせず、自分自身を神の意志 (the will of God) に対して放棄すべきなのである。

このようなカルヴィニズムの理論を教えられることで、多くの人がそのように考えるようになっていくとミルは批判する。そしてそれに対し、人間の可能性を肯定し、「個性的な人格 (Individuality)」を発展させるべきだと主張するのである。それにより、それぞれの人は自分自身を

大切だと感じるようになり、他の人にとっても大切な人となることができる。ある個人の人生の充実が、その人が構成する集団の人生をも充実させることになるだろうとミルは述べている。

その後再びミルは「世論」による圧力について論じる。ミルは、当時の社会においては大衆の力が強く、いわば「集団的凡庸」が支配する時代となっており、ここから「意見の押付け (the tyranny of opinion)」という状況が起こっていると述べる。これに対抗するためにも通常とは異なるエクセントリックな人間が必要であるし、人はそれぞれ自分のやり方で自分を形作ればよいのである。

しかしそれに反対する動きが大きくなっており、「慣習の専制 (despotism of custom)」が、自由の精神をめざす人間の発展に対する障害として、そこら中に存在している。ミルはこのような述べたうえで、変化により発展してきたヨーロッパと、もとは素晴らしかったのに変化を止めて画一的な社会となり、進歩が止まって停滞した中国とを比較する。そして、「個性的な人格 (Individuality)」の発達を保障しなければ、ヨーロッパももう一つの中国になってしまうだろうと警告するのである。

ヨーロッパがそうなることを防いだのは、性格と文化の多様性であるが、そのような多様性は徐々に減少し、確実に中国のように人々が画一的になるような方向に進んでいるとミルは分析する。イギリスでは「世論」によって多様性が日々減少し、画一化が進んでいる。そしてこのような傾向が「個性的な人格 (Individuality)」に敵対的な影響を大きくしているというのである。しかし、これが完遂されるまでにはまだ時間があるので、今こそ「個性的な人格 (Individuality)」の重要性を認識すべきだと主張して、ミルはここでの議論を終える。

第4章と第5章では「個性的な人格」に対する制限が加えられるのは、他者に対して明確な害を及ぼす行為を行なう時だけだという原則に基づき、社会が個人に対して加える制限の限界をどのように打ち立てるかを具体的に検討している。

コリーニは解説の最後に、ミルが社会における人間同士の関係性を分析するとき、次の点を主張することが重要だと考えたと書いている。それは、人間が相互に関係をもつという社会的な事実、人間のどのような行為についても、社会が禁止や命令の権利を持つという道徳的要求を伴うことはないということである。その主要内容は、まず、いかにそれが当人のためだとしても、個人の意志に反して他者への配慮を押し

付けてはいけないということ。そして第2に、個人の行為が何らかの形で他者と関係するとしても、それに対する干渉は、明白な侵害をなす場合だけに限られることである。⁽⁹⁾

以上が『自由論』の主な内容である。それでは次に、これが『文明論之概略』における議論とどのように関連するののかについて検討しよう。

2. 『自由論』から学んだ個別の論点

以上のようなミルの議論が福沢の『文明論之概略』（以下『概略』と表記）の内容にどのような影響を与えたのか検討するために、まず関連の可能性が考えられる箇所について、『概略』岩波文庫版⁽¹⁰⁾（以下『岩波文庫版』と表記）を参照しながら指摘することにした。

①「高遠の議論」と「世論」

まず第1章「議論の本位を定る事」22頁から25頁にかけてである。福沢は22頁で、「高遠の議論」と「通常の世論」を比較し、「高遠の議論あらざれば、後進の輩をして高遠の域に至らしむべき路なし」と書いている。ここは、『自由論』第2章の、様々な議論が提示され討論することで真実に近づいていくというミルの議論を踏まえていると考えられる。さらにそれを「世間通常の人物」の議論である「世論」と対比させ、「世論」が自分とは異なる意見を「異端妄説」として画一化しようとする論じるのも、「世論」による異なる意見に対する抑圧を批判したミルの議論に通じる。また「高遠の議論」の必要性は、ミルが『自由論』第3章で、「集团的凡庸」の支配する社会においては、通常とは異なる意見をもつエクセントリックな人間が必要であると論じることにもつながるであろう。

福沢は、24頁から25頁にかけて「異端妄説」が通論になる可能性を指摘し、学者に対して「世論」を気にせず「思う所の説」を説くよう促し、「他人の説」を「籠絡」して「天下の議論」を画一化しないように警告している。つまり「世間通常の人物」とは異なるエクセントリックな人間が「高遠の議論」を提示することで、「世論」によって「異端妄説」とされる議論も通説になることがあると論じているのである。「世論」は『概略』全体では問題になることがないので、ここで「世論」が様々な意見の画一化を図る可能性について触れているのは、「世論」による異なる意見の抑圧を批判したミルの議論の影響だと考えてよいだろう。

②単一性と「多事争論」

次は第2章「西洋の文明を目的とする事」35頁から40頁にかけての議論である。ここは「人類の働」が単一になることで、「権力」が「偏する」すなわち後に詳しく論じられる「権力の偏重」が生じるが、そうした単調な世界が「多事の世界」になることで文明が進むとする箇所である。ミルは『自由論』第3章において、「世論」が意見を押し付け、社会を画一化する傾向があるとし、それが進むとこれまで多様性があることで進んできたヨーロッパも、中国のように停滞した社会になるだろうと警告する。福沢はここから社会の多様性が文明の進歩に必要であることを学んで「多事の世界」について論じ、その後中国と日本の文明の違いについて詳しく論じた。

このヨーロッパ文明の多様性と他の地域の単一性との比較は、福沢が『概略』に多く引用するギゾーも論じている。松沢弘陽によれば、福沢がギゾーの『ヨーロッパ文明史』の英訳ヘンリー版⁽¹¹⁾を読んだのは、ミルの『自由論』を読んだのと同時期である。⁽¹²⁾それゆえ福沢は、『概略』を執筆するころにはギゾーの議論もミルの議論も知っており、両者を参考にしながら執筆を進めたと考えられる。コリーニによれば、ミルもギゾーに倣って、ヨーロッパ文明が進展する前提条件は、多様性とその間の闘争にあると論じたのだという。⁽¹³⁾

それゆえギゾーとミルを読んだ福沢は、そうした議論を踏まえながら、特に中国について、その単一性と停滞ぶりを強調していたミルの議論によって中国の問題を認識したのだろう。そして福沢は、社会の多様性が必要であることに続いて、中国の停滞性について論じた。彼はミルの中国についての警告を深刻に受け止めて中国の歴史を分析し、「単一の説」と「多事争論」により生じる「自由」とを対比させて描いた。そのうえで日本の文明化を論じるにあたり、日本が「至尊」と「至強」という二つの勢力を持つため単一性を免れており、それゆえ文明化が可能であることを、中国との対比で強調したのである。

③「門閥」と「権力の偏重」

第5章「前論の続」の103頁から108頁にかけて論じられる「智力」による「門閥」の打破に関する議論は、『自由論』第3章「個性的な人格(Individuality)」に関する議論の、「伝統や他者による慣習が行動規範である場合には、個人の自発性が多数の道徳に反するとして排斥され、人類の幸せの、そして個人や社会の進歩の重要な要素が欠けてしまうだろ

う」という議論を下敷きにしたのではないかと考えられる。

福沢はそこで、すべてが伝統的な「門閥制度」によって支配される徳川時代の様子について、「門閥」によらなければ「才智ある者」であって、その才を用いて事を為す事ができなかつたと述べる。そして、そこでは「全国に智力の働く所を見ず」「皆停滯不流の有様」だったのだが、「智力」の勢いが増すことでそれが変化し、「門閥専制を征伐」したのだとするのである。つまり「門閥」がミルのいう「行動規範」としての「伝統や他者による慣習」の意味を持つと考えられたのだと思われる。

第9章「日本文明の由来」244頁から245頁に書かれる徳川体制についての記述も、同様の趣旨である。そこでは「権力の偏重」の体制のなかで人々が箱の中に閉じ込められ、身動きができないような状況になっているとしたうえで、そうした状況においては、人々が「才力」をもっているにもかかわらず、身を守る策を求めるだけとなる。数百年の間それを続けることで、「その習慣ついに人の性と為りて、…敢為の精神を失い尽すに至れり」ということになってしまった。つまり伝統に従うという習性を身につけることで、社会の停滯がもたらされたというのだ。

④儒教と「精神の奴隷」

さらに第9章「日本文明の由来」227頁から233頁にかけて、日本社会の「権力の偏重」の一面として儒教批判が行なわれる。そこで福沢は、社会の様々な要素がそれぞれ独立していないことを述べた後、儒学も政府のなかに取り込まれて独立していないと批判する。儒学は「人間交際」を扱う学問であるのに、「変通改進の旨」を知らない。そして文明の進歩に対応せず、「古を信じ古を慕うて、毫も自己の工夫を交えず」という態度に終始している。これを福沢は「いわゆる精神の奴隷(メンタルスレーヴ)」と呼んで批判した。そして儒学について、「今の世にいて古人の支配を受け、その支配をまた伝えて今の世の中を支配し・・・人間の交際に停滯不流の元素を吸入せしめたるものは、これを儒学の罪というべき」と糾弾するのである。

「精神の奴隷(メンタルスレーヴ)」という語が『自由論』第3章に書かれる mental slavery からとれたことについては、すでに指摘がある。⁽¹⁴⁾しかし福沢は、原文では mental slavery とされていた語を「メンタルスレーヴ」と書いている。ミルの原文では、この言葉は前後の議論の中で書かれる mental freedom と対称させて使われている。つまり思

想や討論の自由が保障されて、「精神の自由の存在する状態 mental freedom」に対し、mental slavery とは、自由が抑圧されて人々が正統とされる考え方だけに頼るようになり、思想的な停滞がもたらされた社会状態をさした表現である。

福沢がなぜミルの原文にある slavery を「スレーヴ」に変更したのかについては、slavery と「スレーヴ」という言葉の意味の違いを使い分けたのだろうと考えられる。ミルの mental slavery は、人々が無批判に正統といわれる考え方に従っている社会状態をさすのに対し、福沢は社会が自由な状態か奴隷状態にあるかを問題にするのではなく、人間のあり方に注目した。彼は、ミルの論じた西洋のキリスト教社会において正統な教義以外が排斥されることで思想が停滞する状況と、日本において自分で考えることをせず他者に従属し、古くからのテキストだけに頼るようになって思想的停滞を招いた儒教の状況を重ねた。また福沢はすでに明治2年2月に書いた書簡において、同じ書を繰り返し読み進歩のない漢学者を批判して、そのような「奴隷」のような学問では独立は難しいと述べていた。それゆえこうした批判を胸に持ちながらミルを読んだ福沢は、これを受けて、「かくの如く古を信じ古を慕うて、毫も自己の工夫を加えず」、「己が精神をば挙てこれを古の道に捧げ、今の世にいて古人の支配を受け、その支配をまた伝えて今の世の中を支配」するような儒者を、「精神の奴隷」という言葉を使って批判したのである。

つまり福沢は slavery という語から奴隷のような儒者の状態を思いうかべ、それを表現するために奴隷という語を「スレーヴ」という英語に直して書き記したのである。このような福沢の英語理解をみると、福沢は、英語と日本語を行きつ戻りつしながら解釈していたことがわかる。

⑤「武人」と「インデヴィデュアリチ」

もう一か所明らかに『自由論』からとられたと言われているのが、『概略』第9章「日本文明の由来」238頁にある「日本の武人に独一個人の気象（インデヴィデュアリチ）なく」と書かれる「インデヴィデュアリチ」である。これは、『概略』第8章「西洋文明の由来」194頁に書かれる「野蛮の種族なる者」が「不羈独立の風」をもち、「独一個の男子と思い」「大丈夫の志」「勇氣」を持つとする部分とつながる。ここはギゾーの『ヨーロッパ文明史』第2講で論じられたローマ帝国末期に西欧に侵入して来たゲルマン人についての叙述をもとに書かれている。ここでギゾーはゲルマン人を野蛮人と呼び、自分のことだけを考える人々だと述べつつ、

そこから彼らの特徴である「個人」として独立して自由を謳歌するという性向が生じ、それがヨーロッパ文明に影響を与えたのだと評価している。

福沢はそれを訳して、ゲルマン人は野蛮の種族であったが「不羈独立」の気風を持ち、自分のことを「独一個の男子」と考え、それを好んだと書いた。そしてそのような人間個人としての自由をヨーロッパの文明に導入したのは、野蛮なゲルマンの功績であるとまとめている。それをふまえて、第9章の「日本文明の由来」の「武人」に関する叙述において、「自主自由の元素を遺した」ゲルマンの「野民」(234頁)に対して、日本の「武人」が「権力偏重のなかに養われ、常に人に屈するを以て恥とせず」という状態であったと批判した。そしてそのまとめとして書かれるのが、「日本の武人に独一個人の気象(インヂヴィデュアリチ)なく」という一節である。

福沢が読んだギゾーの『ヨーロッパ文明史』英訳ヘンリー版には individuality という語は登場しないので、「インヂヴィデュアリチ」という語がミルからとられたことは確実であろう。それゆえ福沢は、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』第2講にもとづき記述した第8章「西洋文明の由来」のゲルマンの「武人」に関する部分では、「インヂヴィデュアリチ」に言及していない。日本の「武人」と比較する第9章においてのみ、日本の「武人」のあり方を「インヂヴィデュアリチ」がないと表現したのである。

しかし実はギゾーの原文では、第3講にもう一度ゲルマン人についての記述がある。そこでギゾーは、独立と自由の気風を持っていたゲルマン人を評価した第2講の内容についてふれ、individualité というフランス語を使っていた。⁽¹⁵⁾ このフランス語は、日本語では「個性」とか「個性的人間」と訳される。本稿では「個性」ではなく「個性的な人格」と訳したが、英語の individuality とフランス語の individualité とは、ともに「個性」という日本語にあたる言葉だったのである。⁽¹⁶⁾ つまりギゾーはそもそも英語の individuality に対応する individualité (個性) というフランス語を使ってゲルマン人について評価していたのであり、それゆえ、ミルのいう individuality と同様な概念について論じていたことになる。しかし、福沢の読んだヘンリー版の英訳ではそこに individualism という語が当てられ、individuality という語は登場していなかった。それゆえ福沢は、ギゾーが individualité (個性) について論じていることを知ることはなかったのである。福沢は、日本の「武人」とゲルマンの「武人」

を比較して考察している間に、ギゾーがミルのいう「インデヴィデュアリチ」という言葉が示す概念について論じていたことを認識したのであろう。そこで「独一個人の気象」に「インデヴィデュアリチ」と付け加えたのである。

すなわち福沢は、ギゾーの英訳ヘンリー版を読むことでは、ギゾーがゲルマン人の性質を英語の individuality に通じる individualité という語を使って論じていることを知ることがなかったにもかかわらず、それが人間の自由と独立という概念を示すものであると理解して、ミルから学んだ「インデヴィデュアリチ」という語に結びつけたことになる。そしてそれは、ギゾーの元の説明に合致したものであった。福沢は、ギゾーが論じたゲルマン人の資質の特徴を表す individualité という概念を正確に理解し、ヘンリー版の英訳を突き抜けて、ミルのいう individuality という語に的確に対応させたのである。このような福沢の西洋概念の把握能力には脱帽するしかない。

しかしミルとギゾーが同じ語を使っていたとしても、両者の間では、この語に対する評価のニュアンスが異なる。ミルの議論において individuality は自由や社会の進歩と関連した重要な概念であった。しかしギゾーはミルとは異なり、これを否定的な意味合いで使用している。『ヨーロッパ文明史』第3講では、ゲルマン人が個人の独立を重視し自由を謳歌するという傾向をもっていたがゆえに、自己中心的で社会性を持っていなかったと批判する。それゆえ彼らがまとまって社会を構成するのは困難だったのだと評するのである。それに対し福沢は、人間の独立と自由を希求したゲルマンの「武人」のあり方を評価し、そのような独立の気概を持たない日本の「武人」を批判したのであった。自由と独立こそ彼が日本に一番必要だと考えるものだったからであろう。

3. 全体の構想に対する『自由論』の影響

以上みてきたように、『概略』には『自由論』から学んだと思われる部分がいくつも見いだされるし、議論の組み立てをミルに倣ったと考えられる部分も多い。しかし『概略』全体を読めると、『自由論』の影響は、個別の議論にとどまらず、『概略』全体の構造に及んでいると考えられるのである。

『概略』を読み通してみると、この書は全体が、西洋文明に存在する「多

様性」や「自由」と日本の「権力の偏重」を対比させるという枠組みで書かれていることがわかる。そして後半に行くにしたがって、「自由」と「権力の偏重」が対比されるようになる。福沢が西洋文明の歴史を描くのに使ったギョーが、ヨーロッパ社会の文明のもととして多様性を重視したにもかかわらず、福沢は西洋文明の重要な要素として「自由」を選択したのである。そしてそれにはミルの議論が大きく影響を与えたと考えられる。それはミルの「自由」の議論には福沢を惹きつける要素があったからである。

まずミルの議論は、文明社会のあり方を個人のあり方と関連させて描いていた。彼は、社会において自由が保障されることにより、個々人は自分の「個性的な人格 (individuality)」を確立することができると論じた。そして、そのように個人がそれぞれの個性を発揮することが許されることで、社会が多様になっていく。こうした多様性が存在することによって社会において様々な選択肢が示され、それらが相互に切磋琢磨しあうことによって、社会が進歩するのだという構図を描いたのである。このように個人の発達が社会の発達につながるとする考え方は、福沢が一貫して抱いていた「一身独立・一家独立・一国独立・天下独立」という社会構想と通じるものだったであろう。こうして福沢は、自分の社会構想の基礎として、「自由」の重要性を再認識したのである。

さらに福沢は、ミルの議論によって文明社会の人間の「独立」のイメージをつかんだのではないと思われる。ミルが『自由論』において、「世論」や特にキリスト教による自由の弾圧に対し批判したのは、それが「個性的な人格 (individuality)」の発達を阻害するからであった。「個性的な人格 (individuality)」とは、ある人間がその人自身であることそのものを意味するのであり、人間は「自分自身そして自分の身体と精神に対しては、当該個人こそが主権を持つ」のである。ミルは、個人がこのように人格を保証されることで、自分自身を大切だと感じるようになると述べていた。これは福沢が後に論じる「自尊」という概念に通じるものでもあるだろう。

ミルはさらに、伝統や他者の作った慣習に従うことは自分で考えるという能力を必要としないので、人間のさまざまな能力を発達させることがない。人間の能力は、様々な場面において「選択する」ことにより鍛えられるのだと述べて、人間が自分の人生を選び取る決定をすることの重要性を説いている。福沢はここから文明社会における人間のあり方を

学んだと思われる。自分の「智徳」を発達させ自分の人生を自分で決定できることこそ、福沢がめざしたことであった。たとえば『概略』第7章「智徳の行わるべき時代と場所とを論ず」『岩波文庫版』172頁から、福沢は人間が「智」を発達させることで自然界や社会的事象を理解することができるようになり、「精神の自由」を得ることで「自からその身を支配」できるようになると論じている。つまり人間が自己決定できるようになるというのである。このような状態こそ人間の「独立」といえるであろう。

福沢は、『学問のすすめ』において独立について論じ、一個の人間として自分をコントロールし、他人に依存しないこととして独立を定義していた。『自由論』においてこうしたミルの議論に接することで、彼は、自由のなかで自分の人生を選び取っていくという独立した人間像をはっきりつかんだと思われるのである。ライアンは、ミルが「個性的な人格(individuality)」の概念を重視し人間の幸せの一部であると強調したのは、彼の進歩的歴史観と関係があると解説する。人間は変化できるものであり、未来は開かれたものである。その中で人間は自覚的に人生を選び取っていく存在なのである。ライアンは、ミルがこのように「自律的な個人(autonomous individual)」の図を『自由論』第3章において描いたのだと解説している。⁽¹⁷⁾ それはまさに福沢のめざした「独立した個人」そのものであろう。

4. 日本社会の分析

このようにミルは、文明社会において自由が保障されることで「個性的な人格(individuality)」の発達が促され、そこから社会が多様になることで発展するという道筋を望ましいものとして描いた。しかし『自由論』の主眼は、そのような発展が阻害されることへの警告であった。その根本にあるのが自由に対する抑圧の問題である。ミルは、自由が抑圧されることで、人々が自由な発言や行動を自己規制するようになり、その結果自分で考えることをやめて多数の考えに従うようになる。そのようにして社会の発展が止まり、社会は停滞的になるのだと論じたのである。

自由を中心とした個人と社会の発展の議論をミルから学んだ福沢は、このようなミルの警告を受け止め、日本社会のなかに、自由による社会

の発展とは全く反対の状況があることを認めた。そして彼はその様子を、西洋の歴史と対比する形で描いたのである。『概略』第9章「日本文明の由来」で書かれる日本の歴史は、自由の保障による社会の発展というミルの議論に対するネガとしての内容を持っている。

まず大枠として西洋の「自由」に対して日本の「権力の偏重」という構図が示され、それにもとづいて日本の状況が分析される。第9章全体が「権力の偏重」という問題意識に貫かれているのである。このような日本社会分析の中心をなす「権力の偏重」という言葉も、『自由論』の中にある *preponderance* という語からとられたと考えられる。

ミルは『自由論』の第2章で思想と討論の自由の重要性を論じる中で、その自由が保障されることによってこそ、人間の間違いが訂正されるのであると論じ、その議論の文脈で *preponderance* という言葉を使っている。⁽¹⁸⁾ この語は通常「優勢」とか「多数」などと訳される。ミルは、昔は正当だと思われた多くの意見や行為が今では間違いとされていると述べたうえで、「それではなぜ、全体として人類の間に合理的な意見と合理的な行為とが優勢 (*preponderance*) になるのだろうか」と書く。そして、それは人間が討論や経験によって間違いを矯正できるという能力を持つからだと述べる。上述したように、ミルは人間が自ら自分の間違いを認識して訂正することによってこそ、人間としての進歩そして社会の発展があると考えていた。様々な意見があることによって今優勢な意見が精査され、真実に近づいていくのである。それゆえ優勢な勢力と同時に、反対意見の存在が不可欠だと主張していたのである。

preponderance という語は、古い使い方として「天秤の皿などが下がる」というものがあつたことが辞書に示されている。「権力の偏重」とは、あらゆる人間関係において不均等な関係が生じていることであるが、福沢は「権力の偏重」を説明する中で、「日本国中に千百の天秤を掛け、その天秤大となく小となく、悉く皆一方に偏して、平均を失うが如く」(『岩波文庫版』209頁)と述べている。(第5章において「門閥」を批判する部分にも天秤の例が出る。『岩波文庫版』106頁)それゆえ福沢は、*preponderance* という語のもつ天秤が一方に傾くイメージから日本における力の不均等な状態を連想し、それを示す言葉として「権力の偏重」と表現したのだと推測されるのである。

ミルはここから、人間が間違いを訂正できる能力を持つという肯定的な議論につなげているが、福沢は、このような「権力の偏重」の状態が

ある日本では、優勢な勢力が他を圧迫し、自由を抑圧して社会の停滞のもとを作るのだという批判につながたのである。

これに関連して、福沢が「権力の偏重」から生じる現象として批判した「強圧抑制の循環」（『岩波文庫版』210頁）における「強圧抑制」という語も、ミルからとられたのではないかと思われる。福沢は、日本社会では様々な人間関係において「権力の偏重」が見られるが、それはひとつの関係において完結するのではなく、抑圧を受けた者が次々と抑圧を自分より弱い立場の人に転化していくという状況があると述べて、それを「強圧抑制の循環」と呼んだ。

福沢がどこからこの言葉のヒントを得たかについて可能性として考えられるのは、ミルの『自伝』に書かれる power of compression という語である。⁽¹⁹⁾ ここでミルは、『自由論』に関して次のように述べている。当時の社会においては、社会的平等が進み世論の支配が進むという必然的な変化において、様々な意見が聞かれるようになるという状況があった。しかしそうした状況は、変化の過程にある間だけである。そのうち、ある意見に関わる集団が大きくなって、社会制度を組織し、人々が従うべき行動様式を作るようになる。そして、自らが駆逐した信条により行使されていたと同じような「強圧の力（power of compression）」を獲得するのだというのである。

compression とは、「ぎゅっと押し付ける」というような意味を持った言葉である。この説明においてミルが意味しているのは、歴史的変化の中で次々と皆の信ずる意見が変わることは多様性の状況のように見えるが、それらが交代しても常にあるひとつの意見が優勢になって、それにより人を画一化しようとする強制力が働くのだということである。つまりミルは、歴史的な推移の中で優勢になった勢力により強圧的な力が常に成立し、それが交代していくことを述べているのである。しかし福沢は、これを同時代的におこる抑圧状態に読み変えて、上から下へと抑圧が移っていく状況として描いた。それが「強圧抑制の循環」である。

これらの言葉の解釈の仕方からわかるように、福沢は英語を読みそれを単に日本語に置き換えるのではなく、それが意味する概念を理解したうえで、そこからイマジネーションをとばし、日本の事象を表現するのに使った。すなわちその語を応用して日本の状況に合わせた内容に転換し、議論を展開したのである。これは福沢の異文化理解の深さを示しているといえよう。

西洋文明の根本にある自由の状況が社会の発達を促すのに対し、「権力の偏重」がもたらすのは停滞した社会である。そして、ミルが停滞した社会をもたらす要因として挙げたのは、キリスト教による人間性すなわち「個性的な人格 (individuality)」の否定と「世論」による圧制が引き起こす自由の抑圧であった。福沢はこのような指摘に関しても学ぶことで、「権力の偏重」により日本社会の停滞状況をもたらしした要因を探った。ミルの指摘するキリスト教による抑圧とは人々の思想を縛るもの、そして「世論」の圧制とは社会構造として人々の自由を抑圧するものである。福沢は、日本においてこれらに対応する要素として、儒教と「門閥」を抽出した。

福沢がこのふたつを社会の停滞要因と考えたことは、『概略』第9章の構成を見ればよく分かる。そこでは日本の歴史を追いながら様々な事項について考察しているが、それらはすべて「権力の偏重」という一点で分析されている。しかし、終わりに向かう『岩波文庫版』227頁から234頁にかけての儒教に関する分析、そして続く234頁から245頁にかけての「武人」に関する分析を見てみると、このふたつの要素が両方とも、社会に「停滞不流」の状況を引き起こした要因として指摘されているのである。そして「停滞不流」とは、ミルによれば「自由」がないことで社会が最終的に陥る状況であった。

まず儒学については、前述したように、後ろ向きの学問に終始し、変化もせずに古いテキストだけをありがたがって「精神の奴隷」になったと批判されていた。しかし注目すべきは、「人間の交際に停滞不流の元素を吸入せしめたるものは、これを儒学の罪というべきなり」という一節である。ここでは儒学のあり方が、社会の停滞を招いたとされているのである。

続く「武人」に関する記述では、「武人」に関して「独一個人の気象 (インデヴィデュアリチ)」のないことが批判されるが、その最後に徳川の治世において、人々が小さな箱の中に閉じ込められ、「敢為の精神」を失ったとしたうえで、「尋常の人類に備わるべき一種の運動力を欠て、停滞不流の極に」沈んだのだと述べられる。「武人」のこのような状態を作り出したのは「門閥制度」であるので、ここは第5章103頁から106頁で論じられた「門閥」に関する記述と合わせて解釈すべきであろう。そこでは徳川時代の専制により「門閥を以て権力の源と為し」、「才智」のある人も「門閥」によって才能を発揮することができなかったと述べられる。

それにより「事々物々、皆停滞不流の有様にあるが如くなり」と述べられ、「門閥制度」が社会の停滞の要因であることが指摘されている。このように福沢は、「権力の偏重」の存在する日本社会を分析する第9章の最後に儒教と「門閥制度」により「敢為の精神」を失った「武人」についての考察を置き、両方の要素が日本社会に停滞をもたらしたのだと指摘したのである。

こうして福沢は、ミルから学んだ、自由→「個性的な人格 (individuality)」の発達→社会における多様性→社会の発展という望ましい文明社会の進展の構図に対して、日本社会について、「権力の偏重」→個人の発達の抑圧→社会の単一化→社会の停滞という図を描くことで、人々に警告を与えようとしたのであった。

福沢はこのような現状分析を行なった結論として、徳川時代が停滞して大業を企てる者がいなかったのは、国民が「治者と被治者」に分かれた状況が続いてきたからであり、そのような状況を引き起こした大本は、すべて「権力の偏重」にあるのだとまとめる。そしてこの「偏重の病」を除かなければ文明は決して進まないだろうと警鐘をならす。しかしそれをやるのは政治家の仕事であって、自分はただ分析をただけであると一歩引いた態度を示すのである。

それでもやはり一言、この状況を反転させるための自らの考えを最後に付け加える。彼はまず西洋人と日本人について比較し、西洋人にもいろいろな人がいて、立派な人ばかりとは限らないのは日本人と同じである。しかしここでも、異なるのは「独一個人の気象」を持っていることだと指摘する。それによってさまざまなことを行ない、富強になったり貧弱になったりする。つまり富強と貧弱は「智力」による結果である。それゆえ「智力」を使い「自からその身に依頼して独立進取の路に赴くべし」と述べて、日本社会の「権力の偏重」に関する分析を終るのである。

5. 〈文明の条件〉としての「自由」

本稿では、ミルの『自由論』と『文明論之概略』を比較することで、福沢が西洋の思想から何を学んだのかを見てきた。これをふまえて最後に、儒学の思想にもとづく社会構想を持った福沢が、西洋と接することで何をどのように学んだのかを検討し、その意味について考察する。

まず始めに、福沢が西洋を学ぶにあたり、儒学による社会構想を持っていたことの意味を考えてみたい。福沢は若い時に学んだ儒学から、その中心的概念である「万物の霊」という人間像を受け取り、生涯理想の人間を表すときこの表現を使った。「万物の霊」としての人間は、学ぶことで「智徳」を発達させ、「一身」から「天下」までの「独立」を果たす。そして最終的には「文明の太平」という理想状態にたどり着くのだ。これが福沢が儒学から学ぶことで掴んだ社会構想である。

福沢がこうした理想社会の構想を持つことの重要性を理解していたことは、拙書『福沢諭吉』において論じた。彼は「空想は実行の原素」と述べて、人間社会の進歩が空想から始まると論じている。福沢はこのように儒学に学んだ「ユートピア思想」を持つことで、それを現実の社会と比較し、現実社会の問題点をつかむことができたのである。⁽²⁰⁾

福沢はこうした構想を持ちながら西洋社会について学んだ。その際重要だったのは、福沢が儒学にもとづく社会構想という軸をすでに持っていることによって、西洋社会との比較が可能になったことである。この〈比較〉の観点こそ、福沢の西洋分析における重要な特徴である。こうして福沢は、『西洋事情』や『学問のすすめ』などにおいて西洋社会の事象と日本社会を比較し、それについて検討することができた。

そのうえで彼は西洋の「文明史」という歴史の枠組みを学ぶことにより、すでに抱いていた社会構想を、人間と社会の発展プロセスとして位置づけることができた。こうして西洋文明の歴史と日本社会の歴史の比較検討が可能になったのである。

このように日本と西洋の社会を比較する中で、福沢は「自由」が日本には存在しないということを始めから認識していた。彼が西洋に学んで初期に著した『西洋事情初編』で「フリーダム」「リベルチ」を「自由」と訳して以来、彼が社会について考える際、「自由」は一貫して問題意識の中心にあった。「自由」に関して福沢が『概略』以前に理解していたのは、「個人が他人の妨げをなさずに行動できる自由」だった。⁽²¹⁾

しかし福沢は、『自由論』に学ぶことで、「自由」に関する認識を深化させた。ミルが『自由論』で論じていたのは、「個人の行動に関する自由」だけではなく、〈文明社会が成立するための基本的条件〉としての「自由」であった。こうして福沢は、日本において文明社会を成立させるためには、「自由」を保障する必要があることを学んだのである。そして、それにより個人の個性の人格の発達と社会の多様性が促されることを理解し

た。そこから日本社会を見たとき、文明の進展を阻害し停滞に陥れる否定的条件があることについても認識した。それが「権力の偏重」である。そしてここでも西洋との比較の観点から、日本において社会を停滞させる要因として、儒教と「門閥」を示して見せたのであった。

このように文明が進展するための社会的条件を理解した福沢は、社会に働きかけて文明を進めるのは人間であるがゆえに、人々に「文明の精神」を学ぼうと主張した。福沢の説明においては「文明の精神」が何を意味するのかはなかなか難しい。しかし拙書『福沢論吉』で示したように、それは「文明社会における人間のあり方」つまり「行動の仕方」や「生き方」がどのようなものであるかを意味していると解釈できるだろう。⁽²²⁾ 人間は文明を進める条件を理解して「文明の精神」にのっとった生き方をすることにより、文明を進めていくのである。そのためには「智徳」を進めて独立し、「万物の霊」に近づいていく必要がある。

しかし福沢は、『概略』の第10章になって、このような文明のあるべき進み方から議論を転換し、日本が当時直面する事態に焦点を合わせる。そして「外国交際」という問題を前面に押し出すのである。日本は外国との関係において独立が危うくなる状態であるとして、国の独立を目的として文明を進めるべきだと結論する。『概略』はこのような問題意識のもと書かれたのであった。

ミルから学ぶことで、福沢は〈文明の条件〉として「自由」を抜き出したが、『概略』が執筆されたのは、ちょうど文明化を阻む「権力の偏重」が解消されるための「自由」という条件が可能になる時期だったといえよう。つまり徳川体制が崩壊することで「門閥」が解体し、儒教の影響が弱まるという状況があったからである。そこで福沢は、そのような状況において、個人が「個性的な人格」を確立し、社会の多様性が発展するという文明化をめざそうとした。福沢の持っていた構想では、それは人間が「智徳」を発達させることで促される。

しかし福沢は、そのような十全な発達は当時の日本では望めない。とりあえず独立をめざす緊急の必要があると最終的には判断し、優先すべき事項を考えたのである。そして「徳」については当時の日本人に大きな問題はなく、これまで修めた「徳」で大丈夫だろうと判断した。そのため福沢は、本来人間は「智徳」を十全に発達させることが必要だと考えていたにもかかわらず、『概略』においては主として「智」の重要性を論じた。そして「権力の偏重」の分析の最後にも「智力」の重要性を

主張したのである。そして、これ以後しばらくは「徳」に関する議論をすることはなかった。⁽²³⁾

しかしこのような福沢の判断が間違っていることが次第に明らかになっていく。当時の日本人は、福沢が期待したような「徳」のレベルにはなかったからである。さらに「儒教主義」が、再び影響力を強めようとする状況になっていった。こうして彼は、明治 10 年代に入って再び「徳」について論じる必要に迫られるようになり、「徳」に関するいくつかの論説を発表することになった。そして本稿との関係で注目すべきは、それらの議論にはミルの『功利主義』の影響が見られることである。これに関しては、稿を改めて論じることにした。

注

- (1) 松沢弘陽「社会契約から文明史へ」『福澤諭吉の思想的格闘』（岩波書店、2020 年）62～63 頁参照。
- (2) 安西敏三『福澤諭吉と西欧思想』（名古屋大学出版会、1995 年）および同『福澤諭吉と自由主義』（慶應大学出版会、2007 年）には、ミルと福沢の関係を検討するいくつかの論文が収められている。
- (3) たとえば関口正司『J.S. ミル』（中公新書）、同「解説」J.S. ミル『自由論』（岩波文庫）は、キリスト教について全く触れていない。キリスト教の教えについてのミルの見解に関しては、小泉仰「J.S. ミルとキリスト教」『哲学』No.123（三田哲學會、2010 年）参照。しかし、そこでも『自由論』とキリスト教についての社会的文脈にはふれられていない。
- (4) Alan Ryan, *J. S. Mill* (Routledge and Kegan Paul, 1974) pp.134.
- (5) Stefan Collini, Introduction, in J. S. Mill, *On Liberty and other writings*, Stefan Collini(ed.) (Cambridge UP, 1989) pp.x. 松沢弘陽は「社会契約論から文明史へ」75 頁において、この点についてに触れている。
- (6) Mill, *On Liberty* in *On Liberty and other writings*, pp.13.
- (7) Ibid., pp.36.
- (8) Ryan, *J. S. Mill*, pp.97. グレゴリー・クレイズは、ミルのキリスト教に対する反対と、それを功利主義におきかえようとする願望は、生涯を通じて彼の思想の導きの糸であったと解説する。しかしこれを公にすることは、当時は大変危険なことだったので、ミルは注意深く、これが明らかにならないようにした。(Gregory Claeys, *John Stuart Mill: A Very Short Introduction*, (Oxford UP, 2022) pp. 104～107.) 進化論を唱えたダーウィンの『種の起源』の発刊も『自由論』と同じ 1859 年だが、彼がキリスト教を否定したとして非難をあびたことは有名である。
- (9) Collini, Introduction, pp.xvi.
- (10) 松沢弘陽校注、福澤諭吉『文明論之概略』（岩波文庫、1995 年）
- (11) François Guizot, *General History of Civilization in Europe*, with occasional

notes by C.S. Henry (Appleton, 1870) これについて最初の英訳者の名前は示されていない。本稿ではこれをヘンリー版と呼ぶ。詳しくは岩波文庫の「解説」368 頁を参照。

- (12) 松沢弘陽「社会契約から文明史へ」62 頁参照。
- (13) Collini, Introduction, pp.xiv.
- (14) 『岩波文庫版』注 354 頁、丸山眞男『「文明論之概略」を読む（二）、丸山眞男集第十四巻』（岩波書店、1996 年）192 頁参照。
- (15) M.Guizot, *Histoire de la civilisation en Europe*, 1855, (gallica.bnf.fr)
- (16) 参考のために『ヨーロッパ文明史』をイギリスのチャンバース社が訳した英訳本を見ると、この部分に書かれたフランス語の individualité という言葉は individuality と訳されている。M.F.Guizot, *General History of Civilisation In Europe* (William and Robert Chambers, 1848) (gutenberg.org) この言葉に関して考察した安西敏三は、ヘンリー版と同時期に日本に入ったウィリアム・ハズリット (William Hazlitt) による英訳版でも、これが individuality と訳されていることを確認している。安西敏三「福沢諭吉と F.P.G. ギゾー、そして J.S. ミル」『法学研究：法律・政治・社会』70 巻 2 号（慶応義塾大学法学研究会、1997 年）参照。
- (17) Ryan, *J. S. Mill*, pp.133.
- (18) Mill, On Liberty in *On Liberty and other wrings*, pp.23. この語は、ミルの父ジェームズ・ミル (James Mill) が 1825 年にブリタニカ百科事典の補遺の中に書いた「出版の自由 (Liberty of the Press)」という著作の中ですでに使っていた。そこでは、出版の自由により議員などの活動についていくつもの報告がなされることで、理性ある人はそれらの証拠の重み (preponderance) により、不正が行なわれていないか、正しい判断ができるだろうと主張される。ミルは『自由論』第 2 章の始めに「出版の自由」に関する過去の議論にふれているので、父の議論が念頭にあったことは確かである。
- (19) J.S.Mill, *Autobiography* (Penguin Classics, 1989) pp.190.
- (20) 福沢のユートピア思想の意味に関しては、中村敏子『福沢諭吉』（集英社新書）171～173 頁参照。
- (21) 自由に関する福沢の解釈については、同書、30～31、34～35、38～39、52～53、57、59、61～64 頁参照。また、拙稿「福沢諭吉における自由の概念」『北海学園大学法学研究』第 58 巻第 2 号（2022 年）も参照のこと。
- (22) 中村敏子『福沢諭吉』99 頁参照。
- (23) この経緯に関しては、同書、112 頁参照。

Liberty and ‘the preponderance of power’ — Yukichi Fukuzawa and J. S. Mill

Toshiko NAKAMURA

Yukichi Fukuzawa read many western books through Edo to Meiji era. Especially J. S. Mill's books were most read. This article tries to compare Mill's "On Liberty" with Fukuzawa's "An Outline of a Theory of Civilization" and find the influence of "On Liberty".

Mill argued the importance of liberty for the development of civilization and Fukuzawa understood it. He analyzed Tokugawa society and pointed out that 'preponderance of power' was the main problem. He wanted to change Japan to be a liberal society, which enabled people's independence. But situation surrounding Japan did not allow that. So he decided to secure the independence of Japan for the time being. But he continued to try to make Japanese people to be free and independent and the society of Japan to be liberal whole through his life, which was the way to civilization.

